琉球大学学術リポジトリ

[寄稿]海洋深層水による医療へのこころみ

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 景正, 金城, 勉, 平良, 雅裕, 新垣, 義清, 渡口, 明, 金城, 貫亀, 楚南, 盛章, MIYAGI, Keisho, KINJYO, Tutomu, TAIRA, Masahiro, SHINGAKI, Yasukiyo, TOGUCHI, Akira, KINJYO, Kanki, SONAN, Moriaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016573

南方資源利用技術研究会誌 Vol. 12 No1 17～18 1996

寄 稿

海洋深層水による医療へのこころみ

宮 城 景 正・金 城 勉・平 良 雅 裕
新 垣 義 清・渡 口 明・金 城 貫 亀
楚 南 盛 章

*医療法人仁愛会浦添総合病院

Study of Medical Treatment by Deep Sea Water

Keisho MIYAGI, Tutomu KINJYO, Masahiro TAIRA, Yasukiyo SHINGAKI,
Akira TOGUCHI, Kanki KINJYO and Moriaki SONAN

Urasoe Sogo Hospital

はじめに

環境問題と健康については、人類にとって欠くことの出来ない永遠のテーマとなっている。これ迄、私たちが親しんできた海については人類の発生源であるだけに、海洋（海洋深層水）の開発は、これからの食糧やエネルギー資源の確保等、多目的な方面で重要な課題である。多くの恩恵をうけた海も医療においてはすでに、今から2,500年前にイスラエルの死海沿岸で海洋療法（タラソテラピー）として発祥している。フランスでも数百年の歴史をもつ海洋療法は、医学的療法として高い評価を得ている。しかし、これらの療法は表層水（探層水とは海底200メートル以下をいう）を利用したもので、富養水といわれる海洋探層水での資料は少なく、近年、高知県での深層水を利用したアトピー性皮膚炎の治療が話題をよんでいる。沖縄県でも、平成5年に沖縄県海洋探層水利用推進協議会が発足され取水に成功し、深層水による医療分野への検討を当院で進めている。

材料及び方法

現在深層水の取水深度については、日本で初めて汲み上げた高知県で320メートル、富山県で321メートル、沖縄県では600メートルの深層水を利用しているが、外国においてはハワイのNELH. HOST PARKで600メートル前後、ノルウェーの国立海洋研究所で65メートルの深水を使用しているようだ。

我々は600メートルの深層水を使用し、特にアトピー性皮膚炎の患者に源水または、80% NaCl脱塩水を直接患部に塗布している。源水については塗布後5分～7分（乾燥しない程度）で塩分を洗い流し、乾燥後の塩による炎症を防止している。また、80%の脱塩水については、炎症の程度により使い分けを行っている。

結果及び考察

アトピー性皮膚炎はアトピー素因のある者に生じ、主として慢性に経過する痒みを伴う湿疹病変と定義されているようで、免疫学的側面と皮膚バリア機能異常もアトピー性皮膚炎発症の重要な役割を果たしているようだ。

アトピー性皮膚炎（AD）は、1993年にHillとSulzbergerが、呼吸器系アレルギーを伴う患者にみられる、特異な湿疹性病変に対して命名したもので、症状は年齢とともに変化していくようだ。

*沖縄県浦添市伊祖4－16－1

中川秀巳等は、ADの発症、治療を考えるには診断基準により、既往歴、家族歴、発症年齢、皮疹形態および発症要因、血清総IgE値、特異的IgE抗体値、治療に対する反応性などの面において、雑多の素因より構成されていることなどを念頭におくことが重要としている。

また、皮膚のバリア機能の異常は、外部からのアトピー因子が入り込みやすく悪循環を起こして、皮膚炎の悪化をまねくようである。化学療法では、充進因子に対する抑制剤（サイトカイン等）を使用したりして、ステロイドを出来るだけ使用しない方法が開発されつつある。今回、我々はそうした免疫学的な機能的方法も活用しながら、本来人間のもつ自然治癒力を利用した自然の海水を用いた、自然療法を1995年より検討し、若干のデータが得られた。これまで海洋深層水を利用してアトピー性皮膚炎の治療に、高知医科大学では60%（200人中）に効果が得られたと報告されていたが、今回の治療で例数は少ないが50%に効果が見られた。特に、1995年1月、小児（1.5才男児）の場合、治療開始後7日間ではほぼ痒みが止まり、痛みがなくなり、発疹が消えるケースが見られた。治療後、卵に対するアレルゲンが高いことがわかった。1996年3月、3才の女児の場合、顔および全身に発疹があり痒みがあったが、1日目より変化が見られ3日目より皮膚がポロポロと取れ、1週間ではきれいに発疹がとれた。後日、卵とピーナツに対するアレルゲンがわかった。1995年10月17日18才の女性で、痒みあり湿疹が頭部に5～6個、胸部全体、腰の周囲、足全体、手のひら、腕、首が真っ赤になっていたが、治療2日後に手や腕の赤みが消え両足の湿疹が引いてきた。3日目、手、腕の湿疹が消え両足の湿疹の赤みがひいて、胸の周囲の湿疹の赤みもひいている。全身の痒みがとれ、首や頭部の湿疹もなくなった。4日目で全身の赤みがなくなり、黒くなったりかさぶたになったが、5日目でこれらの症状もひいていった。6日目で少しあとが残ったが7日目でほとんど消えている。

アレルゲンのテストで牛乳類の値が高いことがわかった。現在は、海洋療法もやめている。これ迄の治療を通して、海洋探層水のもつミネラルがバリア機能破綻により外界からのアレルゲン侵入の促進に対して何らかの形で良化現像を起こし、細胞の活性化を逆に促進しているのであろう。

海水に含まれる微量なミネラル、鉄（Fe）、亜鉛（Zn）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、マンガン（Mn）、コバルト（Co）、セレン（Se）、ケイ素（Si）、ヨウ素（Z）、フッ素（F）、クロム（Cr）、スズ（Sn）など他の80種にもおよぶミネラルが私たちの生命を維持する必要不可欠であることが、アトピー性皮膚症の治療に貢献しているものと考える。

さて、アトピー性皮膚炎を始めとするアレルギー疾患が、特に近年になって増加の傾向にある。

平成4年には厚生省で実施したアトピー性皮膚炎実態調査によると、3歳児の3人に1人がアトピー性皮膚炎を経験していることがわかっている。発症の原因は解明されつつあるが、現在のところさだかでない。多様化してきた社会構造の中で環境の変化や、ストレスを伴う私的環境の変化など、増加する疾病の背景には、さまざまな社会問題があるものと考える。

今回の海洋深層水による治療が、ステロイド依存型皮膚炎症のような副作用の多い治療法に代わる、自然治癒力を引き出す一助となれば幸いである。

参考文献：中川秀巳　アレルギーの成立機序と治療の最前線Mebiovol. 13　No 5　80～87
小川秀夫　大増補・アトピー性皮膚炎の治し方がわかる本　1995年5月1日